優秀賞

紡いだ命

結城市立結城東中学校　三年
根本（ねもと）　隼之介（しゅんのすけ）

十四年前、僕が生まれ、世界を感じたその瞬間、きらめく絆が降りてきました。

七七〇グラム。これが僕が生まれたときの体重です。手の平に乗ってしまう赤ちゃんでした。母も危険な状態。生まれた僕も仮死状態で、「おめでとう」という言葉からは程遠い雰囲気。自発呼吸もできず、二ヶ月間、人工呼吸器の装着。様々な治療、手術。退院は四ヶ月後でした。

いろいろなことを理解し始めた頃、そんなことがあったのかと、実はびっくりしました。正直自分のことなのにピンと来ませんでした。

ただ小学校に入学した頃、気づいたのでした。僕には当たり前だった毎日の薬、毎月の採血。それが皆にはないってことに。僕は、その疑問を一度だけ、母に尋ねたことがあるそうです。その時、母はとても辛かったでしょう。でも母は僕が小さい頃から、体のことについて、かくしたり、ごまかしたりせず、きちんと説明してくれました。

そして、その時母は言いました。

「今、あなたがここにいることは奇跡。それは家族全員がわかっている。あなたの命は、たくさんの人に助けられた。そして、今なおたくさんの人に支えられている」と。

今は薬を飲んでいるものの、普通に生活できている。やはり家族は、奇跡だと言っています。でも、僕だけ病気か…というモヤモヤするものは、抱えていました。

ところが一年前、弟が僕とは違う病気を発症しました。弟も一二〇〇グラムと小さく生まれましたが、幸い弟は、当時二ヶ月入院しただけで順調に育っていきました。そうは言っても、大きな病気の疑いは何回かあり、その都度、検査で疑いを晴らしてきました。

だから、この時も大丈夫だと思っていました。ただ母は、検査結果がでる前から、覚悟していたように思います。普段、狼狽という言葉から程遠い母が、とても動揺していたのを覚えています。弟の前ではもちろん、普段通りだったけれど。

当時、弟のいないところでの、父、母、祖父、祖母はとても悲しそうで、とても辛そうでした。でも、皆、弟の前ではいつも通りの笑顔。だから僕もそうでした。

そして母は、僕と同じように、病気のことを弟に話しました。まだ十歳なのにと思うかもしれません。でも、母は十歳だからこそ、言葉をつくして伝えたのだと思います。

なぜなら、ごまかしながら治療はできないし、本人は一生病気と向きあっていかなければならないからです。

当時、弟は十歳。小学四年生でした。でも、弟は粛々と、病気のことを受けとめていたように思います。不安も不満も口に出さずに。

五年生になった今も、僕を「にぃにぃ」と呼ぶ、かわいい弟です。自分のことは平気なのに、弟の病気のことを考えると、心がツーンとして泣きたくなります。

たまたま病気になった僕たちは、不幸でしょうか。僕は、不幸だとも不公平だとも思いません。誰しも見えない悩みを抱えて生きています。だから、僕たちも大したことはないのです。

でも、僕たちはまだ、十四歳と十一歳です。これから、たくさんの苦しみや挫折を味わうかもしれません。

それでも、僕は思います。

これからもきっと進んで行けます。今までも僕たちは、無数の温かい瞳に包まれてきました。そして、僕たち二人はそれをわかっています。病気にならなかったら、こんな素晴らしいことに気づかなかったかもしれません。何の感謝もできなかったかもしれません。

僕と同じ中学生の皆も、これから、いろいろなことがあるかもしれません。でも、ゆっくりと見渡してほしいです。誰にでもあるのです。きらめく絆と、見守る瞳が…。

「だから大丈夫。」

苦しみを勇気に、悲しみを希望に変えたら、その向こうで輝きが待っているのです。